平成 24 年度やまなし再発見講座＆埋蔵文化財センターシンポジウム
「自然災害と考古学～過去からの警告～」

第 2 回「富士山の災害～雪代（土石流）～」　平成 25 年 2 月 14 日（木）

篠原武（富士吉田市教育委員会）

１　はじめに

雪代（ゆきしろ）は、富士山の雪が春先に解けて、土砂と共に一気に流れ下る土石流のことです。山麓の町を幾度も押し流した雪代は、火山噴火以上に頻発する危険な災害でしたが、一方で溶岩を覆いつくし耕作可能な土地を残す意外な側面もありました。最新の発掘成果も生かし、この雪代の実態に迫ります。

２　雪代の意味とその発生の仕組みについて

（１）　語意と使用例（『日本国語大辞典』より）

①雪代水（ゆきしろみず）

・語　意　雪が解けてできた水。雪汁。雪どけ水。雪代
・使用例　『義経記』（室町時代中期）「下をみれば三大歴々とある紅蓮の淵、水上は遠し、ゆきしろ水に増りて、瀬々の岩間を叩く波」
・単語の例　雪代岩魚－春先に、雪どけ水の渓流で釣れる岩魚
　　雪代山女－春先に、雪どけ水の渓流で釣れる山女
・方　言　春の雪どけで白く濁った川水。春になって山々の雪がとけて川水の増すこと。雪どけ水。（方言としては、東日本を中心に使われている）

②雪代（ゆきしろ）

・語　意　雪代水に同じ。
・方　言　春になって山の雪がとけて川水の増すこと。流氷。雪どけ水。

③雪汁（ゆきしる）

・語　意　雪が解けて水となったもの。雪どけ水。
・使用例　『源平盛衰記』（南北朝時代）「正月十日余りの事なれば、富士の裾野の雪汁に、富士の河水増りつつ、東西の岸を浸したれば、たやすく渡すべき様なし」

（２）発生の仕組み（安間荘 2007「富士山で発生するラハールとスラッシュ・ラハール」『富士火山』より）

ア　発生の流れ

次の①～③の一連の現象を「雪代」と呼ぶ。

① 積雪層に多量の融雪水や雨水が付加され安定を失い滑り出す（スラッシュなだれ）
② 雪と水の混合流体は下方斜面の融解土層を削り、土砂を取り込みながら谷状低地に向かって流下する（スラッシュ・フロー）
③ 谷を通って運ばれた雪・土砂・水の混合流体は気温の上昇や流下中の摩擦熱で雪は水に変わり、土石流となって河川を段波状に流下し山麓扇状地に拡散堆積する（スラッシュ・

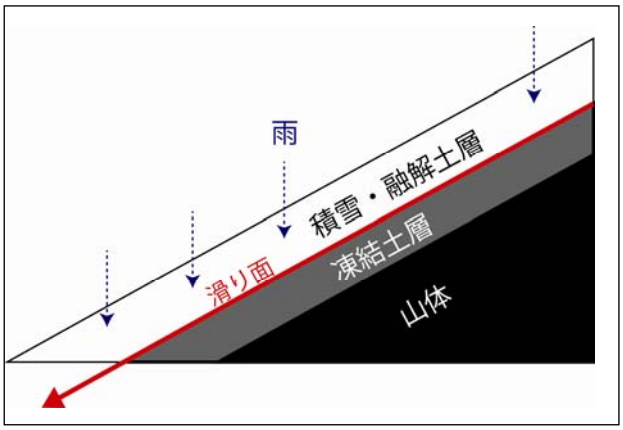


図１　スラッシュなだれの仕組み

ラハール)

イ　発生時の環境

① 富士山の積雪深は、10～2 月は 20～50cm 程度だが、3、4 月になると 50～70cm となる。

② 富士山は玄武岩質溶岩と降下スコリアの互層よりなる成層火山で透水性が極めて良く、夏や秋の豪雨で表面流が起きることは稀である。しかし、秋の終わりから次の春の終わりまで地盤が凍結して空隙に氷が晶出し、水が浸透しにくくなる。

③ ①・②の条件下で、大雨（時間雨量 15～30 ㎜）が降り急激に気温も上昇すると、降雨水と融雪水が積雪層に供給される一方で、凍結した地面のためそれらの水が浸透せず、下層の雪が水で飽和され、積雪層中に水が滞留する。そして、傾斜した積雪層中に浸透した水が斜面の下方へ流れ始め、積雪層は安定を失い滑り出す。滑り面は、積雪層と凍結土層の境である場合が多いが、融解土層と凍結土層の境となる場合もある。こうして発生するのが「スラッシュなだれ」である。

④ ③のように、積雪があって、かつ地盤の凍結や融解がある時期に発生するため、真夏～秋や厳冬期に発生することは稀で、2～6 月（春型）と 11～12 月（冬型）に発生することが多く、特に春型が目立つ。

⑤ スラッシュなだれの発生高度は、雨が降るか雪が降るかという境界高度と関係するため、時期によって 1,500～3,500m と幅があるが、地盤凍結深が 2 月でも 15cm と浅い森林帯よりは、70cm に及ぶ裸地帯で発生すること多い。そして、富士山の森林限界は、2,400～2,700m であるため、その前後での発生が多くなっている。

3　歴史に残る雪代とその類似災害の実態

（安間荘 2007「富士山で発生するラハールとスラッシュ・ラハール」『富士火山』）によれば、雪代は、ラハール（インドネシア語源）と呼ばれる「火山体を構築する溶岩、火砕物、降下火砕物、火山灰などの様々な大きさの火山性土粒子と媒体の水よりなる混相流の発生－流下－堆積のシリーズと認識」できるものの 1 タイプであり、富士山には他にも様々なタイプのラハールがあるとされる。

ここでは、こうした他のラハールも含め、雪代を考えていきたい。

（1）旧石器時代の古富士泥流（町田洋 2007「第四紀テフラからみた富士山の成り立ち：研究のあゆみ」『富士火山』・相模原市教育委員会 1990『富士相模川泥流と最終氷期』）

10～1.1 万年前の古冨士火山の時期に流下し、南東麓と北西麓を除く山麓各地に台地をなして分布するのが、古冨士泥流である。特に、2 万年前前後に富士北麓を流下し、桂川を経て相模川へ流れ込み、相模原や座間まで到達した古冨士泥流が著名である。当時は、最終氷期の最寒冷期にあたり、氷河の形成は海抜 2,600m程度に低下していたと考えられ、氷底噴火に伴う岩屑流、泥流の発生が想定されている。

（2）縄文時代中期末葉（4,500 年前）と後期（4,000～3,500 年前）の火砕流～火砕サージ若しくは土石流層について（富士吉田市 2012『上中丸遺跡（第 2 次)』より）

市内小明見の上中丸遺跡で、火砕流～火砕サージか土石流か未確定の流下物が確認されている。当時の富士山北麓は下記のような状況であったと考えられている。

表 1　遺跡からみた富士北麓の災害と暮らし－縄文時代中期後葉～後期後葉

時　　代	富士山の噴出物・流下物	遺跡の状況
4,900～4,700 年前：曽利Ⅳ（古 ）	富士山頂から S-5・S-6 噴出し、富士北麓にも降下。	上暮地新屋敷遺跡では、堅果類の採集地であった可能性があるクリ・オニグルミの林が焼失した。同時に、曽利Ⅳ（古）の上中丸遺跡・宮の前遺跡・久保地遺跡の竪穴住居跡も火山灰で埋没した。
4,700～4,500 年前：曽利Ⅳ（新）～曽利Ⅴ（古）	火砕流～火砕サージ？・土石流？流下	久保地遺跡・上中丸遺跡・宮の前遺跡では再居住がなされるが、上中丸遺跡には、その後に火砕流～火砕サージ？と土石流？が流下し、そ

		の厚さは 1m に及ぶ。
4,700～4,500 年前：曽利Ⅴ（新）～曽利Ⅴ（末）		上中丸遺跡に再居住するが、竪穴住居跡は構築しない。注口土器に磨製石斧８本・黒曜石１点を入れたものを埋納して以後、称名寺式の土器片が数点残されるが、生活の痕跡はほぼ皆無になる。
4,000～3,500 年前？：堀之内２式～曽谷式？	火砕流～火砕サージ？・土石流？流下	上中丸遺跡を再び火砕流～火砕サージ？と土石流？が流下し、その厚さは 1m に及ぶ。

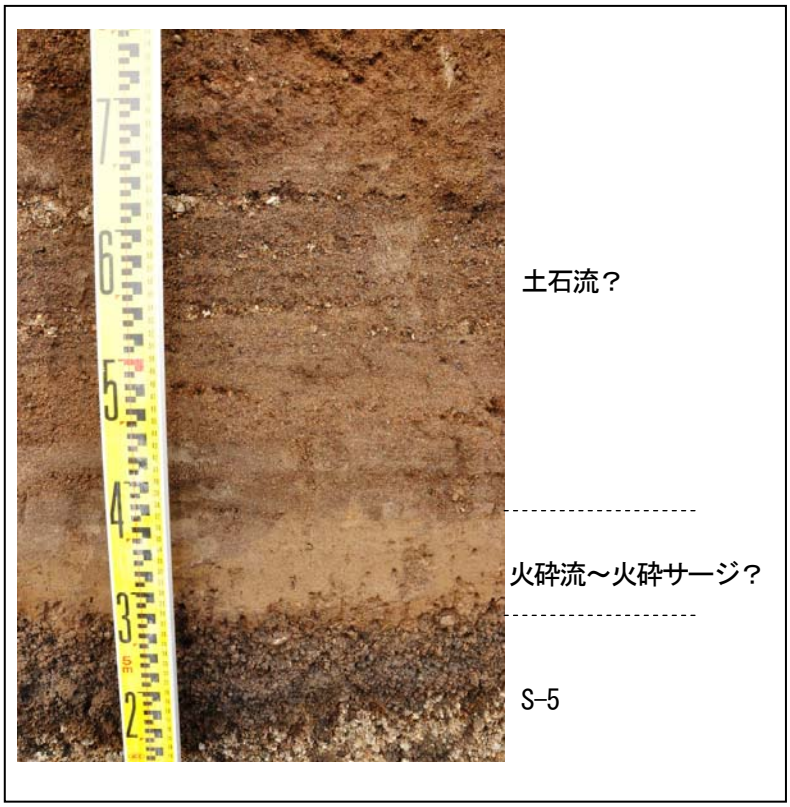


写真１　上中丸遺跡の土層

（３）縄文時代晩期中葉（約 2,900 年前）の御殿場岩屑流（宮地直道ほか 2003「富士火山東斜面で 2,900 年前に発生した山体崩壊」『火山』49-5）

2,900 年前ころ、富士山東斜面の古冨士火山部分は、噴気活動等により熱水変質が進行していたとされる。そして、大規模な地震や水蒸気爆発などの発生をきっかけにその部分が山体崩壊し流下したのが、御殿場岩屑なだれ堆積物と御殿場泥流堆積物である。御殿場泥流堆積物については、相模平野を流れる酒匂川や沼津平野を流れる黄瀬川沿いに分布し、広域にわたって被害を与えたと考えられている。

（４）中世の雪代

ア　川口・舟津口登山道の流失

『駿河国新風土記』に「川口ヨリノ登山ニハ、舟津村ニイタリ、夫ヨリ北口ノ正面ヲ登リシガ、コノ道絶シヨリ、今ハコノ舟津村ノウチ、胎内ト云ル洞穴アリ。コノ所浅間山王社アリ。神主中村氏、コノ所ヨリ御膳場三ツ穴ヲノボリ、小御嶽ニイタリ、夫ヨリ尾根伝ヒニ、吉田口五合目に会シテ登山ス。」とあるうちの絶えたとされる道は、「元弘元年（1331）七月七日、大地震、富士山峯崩数百丈トアリ。此時火ノ事ハ聞エズ、其崩レタル所、西北ノ方舟津村ヨリ、小御岳ヲサシテ登リシ道アリシガ、コノ時ニクヅレタリト云。」とされる。

その真偽については、今後の検討が必要であるが、12～13 世紀以降に、吉田口登山道や北口本宮浅間神社の西側を岩なだれが流れ下ったという指摘が都留文科大学名誉教授上杉陽氏によりなされており、こうした災害の前後で登山道の付け替えが行われた可能性はある。

イ　古吉田を覆う雪代

表 2 にあるとおり、雪代が吉田において史料上に登場するのは、中世の記録『勝山記』からである。この記録では、雪代を表す「雪代水」若しくは「雪水」と洪水を表す「大水」が使い分けられており、雪代と通常の洪水が異なるものと認識されていたことが分かる。なお、天文 14 年（1545）以前に雪代の記載がないという問題については、既に指摘されている「勝山記」の記録者がその拠点を変えたことが背景にあると考えられる（末柄豊 1995「『勝山記』あるいは『妙法寺記』の成立」『山梨県史』3）。

具体的には、記録者の 1 人であった日国は、明応 9 年（1500）から妙法寺（富士河口湖町小立）、永正 5 年から逝去する大永 8 年（1528）までは常在寺（富士河口湖町小立）の住持であり、現河口湖北岸に拠点をおいていたとされる。そのため、河口湖北岸の記載が詳細となっているが、その逝去後は、吉田の記載が詳細になると共に、河口湖を「当海」、「此海」と記していたのを「大原ノ海」、「大原海ミ」（大原は、大石・長浜・大嵐・鳴沢・小立・舟津の 7 村を含む地域のこと）と記すようになっており、日国後の記録者が吉田の近辺に拠点を移した可能性が指摘されている。こうした河口湖北岸から吉田への拠点の移転と、雪代災害が河口湖北岸でみられず、吉田特有の災害であることが、天文年間に入って雪代の記載が出てくることの背景にあったと考えることができる。

この『勝山記』において、吉田を襲った雪代の記載は、天文 14 年（1545）の条にある。そして、この時のものかは不明であるが雪代堆積物とみられるものが、山梨県埋蔵文化財センターによる調査で、元亀 3 年（1572）に現在の上吉田へ移転する前の地とされる古吉田遺跡で確認されている（山梨県教育委員会 2012「元吉田保健所解体事業　試掘《吉田宿》」『山梨県内分布調査報告書』）。

現在の上吉田は、この古吉田が雪代に襲われた後に、雪代災害を避けるために移転した町であるという伝承があり、また、上吉田は古吉田に比べて高台に位置するという指摘（若林淳之 2002「富士山土石流への挑戦の歴史」『富士山の自然と社会』p339-342）もあるため、今後もこの堆積物の形成時期と成因の調べ、町の移転との関係があるか否か検討を行う必要がある。

表 3　富士山北麓の雪代・土石流災害

和暦	西暦	記録内容	溶岩・地震
元弘元年	1331年	地震有テ、富士ノ絶頂崩ルゝ事数百丈也ト（『太平記』）	
明応7年	1498年	八月廿五日辰尅ニ大地震動メ、日本国中堂塔乃至諸家悉頽レ落。大海邊リハ皆々打浪ニ引レテ伊豆ノ浦へ悉くク死失。又小河悉損失ス。同月廿八日大雨大風無限、申剋當方ノ西海・長浜・同大田輪・大原悉ク壁ニヲサレテ、人〃死ル事大半ニ過ヘタリ。アシワタ・小海ノイハウ皆悉ク流テ、白山ト成申候。（『勝山記』）	明応大地震（並木A遺跡・東臼田和遺跡）？
明応8年	1499年	正月五日大地震動スル也。（『勝山記』）	
明応9年	1500年	此年マテモ大地動不ル絶。－中略－六月四日大地動。上ノ午ノ年大地震ニモ勝レタリ。（『勝山記』）	
天文14年	1545年	二月十一日冨士山ヨリ雪代水ヲシ候テ、吉田ヘオシカケ、人馬共ニオシナカシ申候。殊ニ其ノ水ニテ、下吉田ノ冬水ノ麦ヲ悉クオシナカシ申候。（『勝山記』）	古吉田遺跡？
天文18年	1549年	此年ノ卯月十四日ノ夜中ノ比、ナイユリ申候事、言悟道断、不及言説ニ候。五十二年サキノナイ程ト申傳へ候。（『勝山記』）	
天文23年	1554年	正月雪水冨士山ヨリ出テ申候事、正月・弐月・三月マテ十一度出テ申候。余ノ不思議サニカキツケ申候。（『勝山記』）	
永禄2年	1559年	同正月之申之日雪水出候テ、悉ク田地・家・村を流シ候。（『勝山記』）　十二月七日ニ大雨降、俄ニ雪シロ水出テ、法ヶ堂皆悉流レ申候。又在家ノ事ハ中村マルク流シ候事無限。（『妙法寺記』）	
安永9年	1780年	雪代（下吉田）	
寛政6年	1794年	雪代（下吉田）	
享和元年	1801年	雪代（大明見・小明見）	
天保5年	1834年	雪代（下吉田・大明見・小明見）	
天保8年	1837年	雪代（下吉田・新倉・小明見・大明見）	
天保9年	1838年	雪代（下吉田・新倉・小明見・大明見）	
安政7年	1860年	雪代（新倉）	

（5）天保5年（1834）の雪代

ア　天保飢饉の状況（米崎清実2001「第七章　地域社会の変質」『富士吉田市史』通史編2・須田努2007「第12章5節　天保騒動」『山梨県史』通史編4）

天保4年（1833）の文書「凶作につき二十一カ村年貢引方愁訴状写」（『富士吉田市史』史料編3 №170）によると、現在の山中湖村・忍野村・富士吉田市・富士河口湖町・鳴沢村は下記のような状況であった。

① 夏は冷気が勝ったが、残暑となり、富士山の降雪も遅れた。

② 出穂が差し支え、諸作の実りも悪くなった。ただ、諸作は平均して4・5分の実りはあると見込んだ。

③ 9月中旬に大霜があり、諸作が残らず不作となった。

④ 麦の作付けも遅れたため、地面が凍り、実が入らなかった。一毛作のところには、猪と鹿が踏み荒らしたため、急いで刈入れしたが、やはり実入りが悪かった。

⑤ 桑も高値で、蚕の育ちも良くない中にも係らず、絹相場は近年稀にみる低値となった。雑穀は国々が飢饉のため、高値となり、その買入れも年貢上納も難しくなった。

その後、天保5年（1834）には米価が下がるが、天保6・7年は不作となり、米価が跳ね上がった。その結果、各村々は立ち行かなくなり、天保7年には甲斐国全域で打ちこわしが始まった（天保騒動）。

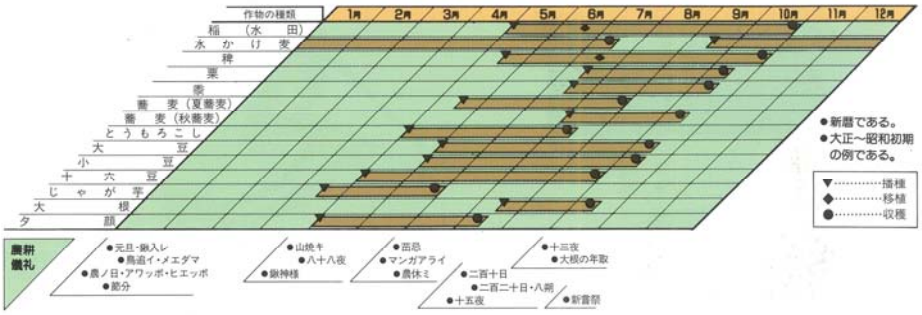


図2　主要作物の栽培暦－市内新屋の例－（富士吉田市歴史民俗博物館1995『展示解説』より）

イ　雪代の詳細

発生日は、天保5年（1834）4月8日（新暦の5月16日）で、富士北麓と南麓の両側において、ほぼ同時刻に起きた。諸文書の記録を総合すると、富士北麓では、朝より大雨と南からの大風があり、12時～14頃に富士山から山鳴りと震動と共に雪代が押出してきたとされる。

南麓でも朝より大雨と大風で、12時頃に富士山の山鳴りと共に雪崩れによる水押しが田畑を覆った。14時になると山上鳴動し、洪水焼砂が堰と田畑を襲った。

この災害の北麓と南麓との差は、北麓では「雪代」と呼ばれ、南麓では「大水」・「洪水」と呼ばれるという名称の違いと、北麓では多くの家と田畑が土砂で埋まったが、南麓では家や田畑の埋没より浸水被害の方が多く、潤井川と堰といった川や用水の埋没が目立つという被害内容の違いがある。

表3　富士吉田市域の各村の詳細（『甲斐国志』（文化11年（1814）編さん）より）

№.	村　　名	石　　高	戸　数	人　口	馬　数
1	下吉田村	898石1斗8升6合	508戸	2,025人	60頭
2	大明見村	155石3斗5升	201戸	731人	62頭
3	小明見村	205石9斗7升8勺	249戸	871人	71頭
4	新倉村	285石7斗5升5合	229戸	944人	40頭
5	新屋村	56石4斗8升3合	135戸	529人	30頭

6	上吉田村	628 石 5 斗 1 升 1 合	335 戸	1304 人	26 頭
7	上暮地村	185 石 3 斗 5 升	201 戸	731 人	62 頭
合　　計		2415 石 6 斗 1 升 3 合	1858 戸	7,135 人	351 頭

表４　天保５年（1834）４月８日の雪代の詳細（富士北麓）

№.	文書名（作成年）	作成者	雪代の詳細	引用文献
1	雪代出水居屋敷田畑流失のため谷村御囲籾下付につき三カ村請書写（天保５年５月）	下吉田村・小明見村・大明見村	朝六ツ（6 時）より南大風雨→雪代時節のため人足を出して、出水防方手当を行う→昼九ツ（12 時）に冨士山で震動がし、雪代が一面に押出した→一同恐怖し、地高の場所へ逃げた→その後戻ると、田畑と家が土砂で埋まっていた	『富士吉田市史』史料編 3 巻　№190
2	雪代出水のため夫食代拝借につき三カ村請書写（天保５年６月）	下吉田村・小明見村・大明見村	大嵐があり冨士山雪代押出す→家 130 軒が土砂に埋まり、雑穀と家財諸道具が残らず流される	『富士吉田市史』史料編 3 巻　№191
3	雪代出水田畑流失につき四カ村年貢引方願書写（天保９年４月１日）	下吉田村・新倉村・小明見村・大明見村	大風雨→雪代満水土砂・大石等押出→1,500 石中 700 石流失。その後、起返しするが、天保８・９年も満水押出し相次ぎ、200 石分が手入れ困難となる	『富士吉田市史』史料編 3 巻　№186
4	雪代出水下吉田村居屋敷田畑流失につき夫食手当御救金下付願書写（天保５年４月）	下吉田村	大風雨で冨士山雪解崩、雷の如く山鳴響き、堀筋へ押出す→御普請所が流失、家 48 軒押埋め、流失したのもある。田畑 500 石が砂で深く埋まる。麦の 6・7 分が押流され、6･7 分の人が立ち行かなくなる。	『富士吉田市史』史料編 3 巻　№189
5	午年雪代出水五ヶ年違作次第書之事（天保 10 年）	大明見村	雨・南風激しい・富士山山鳴り→昼九ツ（12 時）に黒煙を立て雪代押出す→人々は高座山・日向道・小原や家の２階へ避難する→明くる明け方雪代水が引き、人々戻る→家 70 軒が 5･6 尺ほど埋まる・諸道具押流す・蔵の穀物は泥砂で埋まる→村人が集まって相談し、家を掘りあけ穴蔵のような中に暮らし、その後家の周りを掘り出した。田畑には、大木・小木が散らばっていたため、それを一箇所に集めた。そして、金銭を集め、田畑を開発した。ただ、この年は、夏作も冬作も無く凶作だった→天保７年の雪代で砂原押流される。この年は大凶年となり、飢死に出る。→天保８年は大風で不作	〃　p131-144
6	雪代出水小明見村居屋敷田畑流失につき見聞願書写（天保５年４月９日）	小明見村	大風雨で洪水→昼八ツ（14 時）より冨士山雪代押出→田畑・屋敷を押し流す。作物も全損。	『富士吉田市史』史料編 3 巻　№188
7	当月八日雪代満水ニ付日記帳（天保５年４月９日）	小明見村	八ツ（14 時）に富士山北面で昼鳴し、雪代満水押出す→小佐野堤を押流す→大明見村の家 72 軒が 5･6 尺埋まる→小明見村の田畑と木財を押下す	すその路郷土研究会 2009『富士山の周辺の災害と対応』p128-130
8	『菊田日記』35 番（天保５年４月８日）	上吉田村菊田式部	朝より風雨強い→「昼頃雪崩、そらどよみ、つちをうごかし、不二の雪くづれておつる、おとのはげしさ」→大明見村の家 3、4 軒、馬 3、4 頭埋まったため、掘り出して助ける。昼なので山に逃げて怪我人はなかった。→焼橋・米倉橋・夏狩堰・十日市場橋堰を押流す。上吉田の東堀（間堀川）の橋などを押払い、	〃　p118-126

			下吉田の大森で2・3軒押払い、西の大堀（宮川）下の西古屋敷18軒を埋める	
9	「甲州より言来る書通（天保5年4月16日）」『甲子夜話』巻4	甲州の人	四ツ頃（10時）より震動して、北口七、八合目より吹出し、大岩大木押流す→明見村の家7、80軒が残らず埋まる。ただ、昼中であったため、怪我人はなかった。しかし、牛馬は全て埋まった。このため、沼津より甲府へ行く道は通れなくなって大廻り道をし、魚を運ぶ馬士達は難渋した。	松浦静山著・中村幸彦、中野三敏校訂1982『甲子夜話』3篇1（東洋文庫413）
10	「下吉田の富農柏木峻助の話し」『甲子夜話』巻4	下吉田の富農柏木峻助	朝四ツ（10時）、富士山上より雪水おびただしく流れ来る→人家田地に障りはなかった。ただ、空色南天暗黒にして、必定異変有るべき模様に察したので、人々は用心し、もしものことがあれば山上に逃げようと話し合った。→九ツ（12時）、鳴動甚だしく、山上より砂土大石をまじえ崩来たため、人々は山上へ逃げ、死人怪我人を出すことはなかった→五カ村の田地、川筋とも砂石に埋まり、深いのは1丈1、2尺、浅いのは6尺に及んだ。	〃
11	「田畑流失につき届書」	甲府代官	大雨にて不二雪代押出し→三カ村ほどは皆潰家となる。一抱えもある大木押流す。四、五尺の大石を押流す。人力にて防ぐことはできず、人々は避難し怪我はなかった。→この村々は麦作の取入れができず、秋作もできなかった。この他にも田畑へ土砂押入ったのは6、7カ村もあった。	『富士の歴史』

表5　天保5年（1834）4月8日の雪代の詳細（富士南麓）

No.	文書名（作成年）	作成者	雪代の詳細	引用文献
1	「案主富士氏記録」（天保5年4月8日）	案主富士氏（浅間大社）	大風雨で富士山大荒→洪水で欠畑沢大水。百姓平吉宅流失。島之谷戸田地流失。大岩畑流失。源道寺流失。	『浅間文書纂』
2	「天間村田畑破損につき届書」（天保5年4月24日）『甲子夜話』巻4	沼津藩	明け方より大風雨強→昼九時（12時）雪崩で富士山鳴り、急に水押し、田畑共平押し、家居まで水が入った→追々水が引いた→八時（14時）に山上震動。暗夜の如くなり、洪水焼砂押来り、大水大木押出→用水堰と潤川通水が深さ1丈8尺から2丈あまり埋まり、田畑過半が洲入りとなり、農家も水入りになる→川下へは人馬が流れ死、穀類が流出する。破損した田畑の面積や、流死の人馬の数は分からず、追って報告する。	松浦静山著・中村幸彦、中野三敏校訂1982『甲子夜話』3篇1（東洋文庫413）
3	「前に云医生へ、参政の臣水谷某より文通の略」（天保5年5月15日）『甲子夜話』巻4	参政の臣水谷某	富士山抜出の届書はないが伝聞では以下のとおりである→嵐の日に抜出があった。宝永山より抜跡の方が大きいと聞く。→吉原宿の方に向かって、裾野の内、6里から14里ほどの間が一円に荒れる。川筋が3筋できた。村がたくさん流れた。沼津藩領も押流されたと聞く。ただ、街道筋までは被害は及んでいない。→以上は、風評のみである	〃
4	「法華宗富士山上へ多宝塔建立と天保五年四月富嶽水変の事」『甲子夜話』巻5	松浦清山	法華宗の人々が天保3年に、豆州三嶋の女3人が弥陀ではなく題目を唱えて山上し、山中に多宝塔を建てた。しかし、山神が受け入れなかったためか崩れた→法華宗の人々は七面堂、番神堂、鬼子母堂も建てたが、今年4月富嶽水変のときにこの堂宇を建てた人里の村々が其災いを蒙ったという。→南北に吐出し	〃

			8 カ村のうち、御領（石和代官所支配）へ砂水入り、其中の明見村と下吉田村で 100 軒余が土中に埋まり、牛馬も多く斃れた。人々は白昼であったため無事だった→南口は御領と沼津藩領へ吐出し、再び5月の末にもこの災いあり、かの3つの堂も災いを受けたという。天怒か山霊か、不思議なことである。	
5	「大宮町ほか田畑破損につき届書」	韮山代官所	家居が流失し、麦作一面を押埋め、深さ1丈より3、4尺位押掘るところが田畑に数ヶ所でき、大荒れになった。→富士山木立上下の3、4ヶ所も焼砂押出し、遠方よりも見える。	浅間神社社務所編さん 1928『富士の研究 Ⅰ　富士の歴史』
6	瓦版「富士山出水之図」		7 日夜より、駿河国富士郡で大雨降る→8 日も益々大風雨で午の刻（12 時）より不二山震動し、五合目より雪解水が押出し、萱野で3筋に分かれ、1筋の幅は半里ほどあり、皆泥水で裾野村々を押出す→未刻（14 時）水勢盛んとなり大浪が裾野村々の建家を押流し、牛馬など倒し流し、溺死した者は数え切れない→大宮の町並も流され、大木と大石も流れ下る→水筋流し通りは7、8 里、其巾は3 里に余り、推定12、3 里の間が荒地となる。	若林淳之 2002「富士山出水之図」『富士山の自然と社会』p367-368
7	瓦版「富士山吉事噺（ふじさんふしぎばなし）」		富士山東少し南より駿河領まで伊豆流有地で、5月1日より暑きこと限りない大旱で、人々はあやしんだ→6 日は甚だしく大旱となった→7 日八ツ（14 時）より天地もくつ返るばかりの音して、山の半ばより大山のような雪がまろび落ちて出水し、大木と大石を飛ばした→水筋数ヶ所より裾野村々を押出し、泥海のごとくなる。牛馬の死んだものも数え切れない→凡そ左右4里、通り7、8 里が荒地となる。	富士吉田市歴史民俗博物館 2005『災害と復興』p8

186　雪代出水田畑流失につき四カ村年貢引方願書写

天保九年（一八三八）

乍恐以書付を御歎訴奉願上候

甲州都留郡下吉田村外三ヶ村役人共一同奉申上候、去巳年以来凶作之上、私共村方之義去午四月八日大風雨ニ而冨士山ゟ雪代満水土砂・大石等夥敷押出し、四ヶ村ニ而御高千五百石余之所凡七百石余も流失仕、追々起返り出情仕候処、又候去酉二月・当戌ノ二月両度大風雨ニ而満水押出し、土砂・大石等押掛、凡弐百石余之場所者迚茂手入難及、必至与難義仕居候処、今般御巡国ニ付不顧恐をも御歎訴奉願上候、何卒格別之以御慈悲を右場所永引ニ被　仰付被下候様偏奉願上候、以上

都留郡下吉田村
名主　右　膳
同　安左衛門

戌四月朔日

資料１　富士吉田市史編さん室 1994『富士吉田市史』史料編３より

〔五〕 五月の中ばなりし。浜町へ能を観に往たる桟鋪にて、召連し女中何れよりか聞けん、語るには、富士の山積雪のために拆崩れ、形も変りたりと。傍に梅塢ゐて云には、成るほど斯の如く山腹崩下りて、麓の田千石余の処埋もりたるが、其土尚推出して、其末海中に一万石余の田畑にも成るべき地を現じたりと。何に斯の如くなるや。富士の変は違ひあるまじ。

〇是より近所にゐる御勘定中村某に問たれば、富士崩のさまは、沼津領のうち七村、田家とも埋もり、人も夥しく死亡せしと。なほ委くは後聞を申すべし。

〇又予が医生に、参政小笠原相州に縁家ある者あり。彼縁者云しとは、富士は四月の末とか、宝永山の側の方崩れ、縦六里余、横は一里の内外なるべし。故に東海道、原、吉原のあたりより望めば、其崩崖より天を見通す所有りと。この変にて田地人里六七村は押潰し、死者も多かりしと。又新に流川二道を生じたりと云。

〇又平戸の庖人近頃出府す。因て東道は何にと問へば、曰。沼津のあたりなるが、行道の側、田中に水溢れたると覚しく、土荒れて平地となり、堤あるも壊破れ、又石砂の出敷たるを取除け、或は地処の修造など為を見たれども、是と心つかずして行過ぎ、其後前駅にて聞けば、富士の方三里余奥より出水して、田地等推流したる抔聞しが、委しくは問ざりし。又は地を海中に推出せしと云ことは見聞せず。

資料２　『甲子夜話』巻４（松浦静山著・中村幸彦、中野三敏校訂 1982『甲子夜話』3 篇 1（東洋文庫 413））

〔二〕 近頃は法華宗の崇信甚しくなりて、天保三年の夏、富士へ上る者豆州三嶋の女三人、山禁を犯し題目を唱て山上す。是まで登山の輩は、以前弥勒〔人名〕と云行者、祈て山神の霊告を得、弥陀の名号を高唱して上ること始り也。然るを此度法華宗始て題目を高唱して山上せし也。其後この輩、山中に多宝塔を建しが、山神受けずや有けん尋で壊失せぬ。又彼徒、彼宗の尚む所の七面堂、番神堂、鬼子母堂を建しに、今年（五年）の四月富嶽水変のとき、彼の堂宇を建し人里の村々皆其災を蒙りしと。其所々は、南北へ吐出だせし八ヶ村、御料〔北口〕柴田善之丞支配所へ砂水入、其中明見村下吉田村にて百軒余土中に埋れ、牛馬も多く斃る。人は白昼ゆゑ死せざりしが、南口は御料并水野羽州の領地へ吐出し、再び五月の末に至り復この災有て、かの三つの堂も災に罹れりと聞く。抑天怒か、又山霊か、不思議なること也。

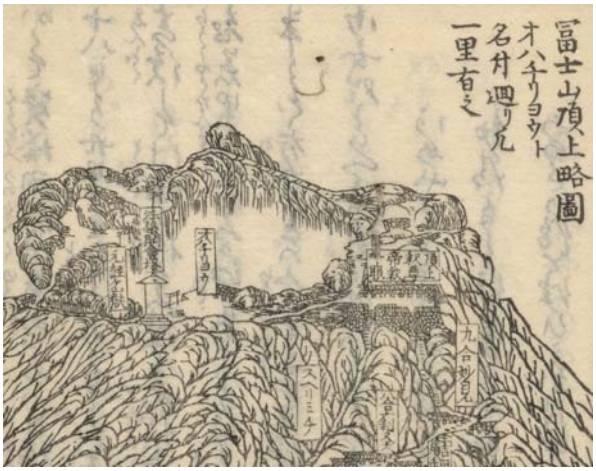
資料４『甲子夜話』巻４

〇甲州都留郡郡内の中下吉田と云所の富農、柏木峻助なる者、文学を好み、来て朝川鼎の門に游ぶこと四年に過ぐ。然るに頃ろ郷より帰を促す。其言に曰。四月八日朝四ツ時頃、ふと富士山上より雪水夥しく流れ来る。然ども人家田地に障る程ならざれど、其日の空色南天暗黒にして、必定異変有るべき模様に察しければ、諸人相謀て用心し、若しものこと有らば向の山上に逃る当しと云合せ居たるに、果して九ツ時頃鳴動甚しく、山上より砂土大石を雑へ崩来るに因て、皆云合せたる如く、やうやく其身ばかりを脱れ、彼山上に走登りたれば、死人怪我等は無けれども、彼地五箇村の田地、川筋とも砂石に埋み、深きは一丈一二尺、浅きは六尺余に及ぶと。」是に就て峻助も五月二日甲州へ還ると。かの峻助が所持の田地も、金高に当れば大抵千両許の処、悉皆変土となり、十方に暮れたる体なりと云。

資料３『甲子夜話』巻４

写真２　車返霊場の日蓮上人像

望月真澄 2008「車返霊場関係資料」『身延論叢』13 に銘文ほか詳細の記載あり。この銘文よると富士山頂上へ天保 12 年（1841）奉納されたものであることが分かる。



資料５　『法華富士の記』（信州大学附属図書館所蔵）

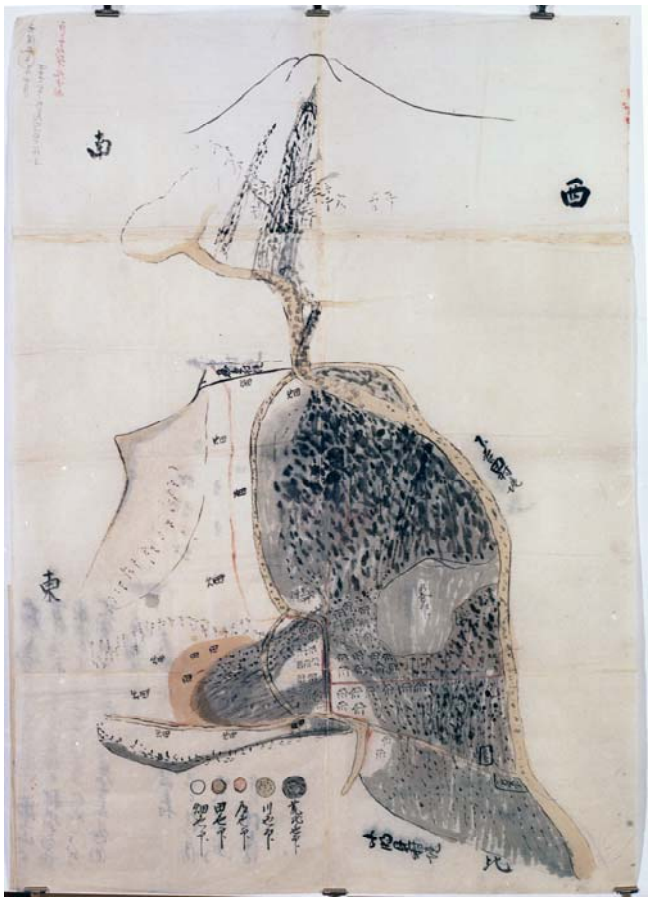
天保 9 年（1838）刊行で、山頂に「法華開会塔」が描かれている。

※写真 2・資料 5 は、表 3 の№4 で記されている法華宗の造立物と考えられる。

ウ　２つの雪代絵図にみる雪代災害の実態

※富士吉田市歴史民俗博物館 2005『災害と復興』及び 2004『国絵図・郡絵図・村絵図』に絵図掲載

資料６　富士山雪代絵図（下吉田村）天保 14 年（1843）　富士吉田市歴史民俗博物館蔵



資料７　富士山雪代絵図（大明見村）天保 5 年（1834）富士吉田市歴史民俗博物館蔵

資料六の届出文の抜粋

右者今般被仰渡之趣ヲ以当村
方本免場并起返被下荒地其外
共巨細色分ケ仕麁絵図相認奉
差上候通少茂相違無御座以上

天保十四卯年八月

資料七の届出文の抜粋

右者当四月八日大風雨ニ而富士
山〆雪代満水ニ而大石大木押出
シ耕地者勿論家屋敷迄石砂ニ而
押埋荒地相成候ニ付、右今般
ニかぶせ麁絵仕差上申処、絵
図面之通り相違無御座候以上

天保五年
午四月

エ　大明見村の中沢堤築造と下吉田村の堤について（図３・図 4-1）

大明見村では、天保５年の雪代を契機に、桂川右岸への石積みの堤の築造が同年中から行われ、天保 12 年（1841）頃には完成した（星野芳三 1999「近世大明見村中沢堤について」『山梨県堤防・河岸遺跡分布調査報告書』）。また、下吉田村についても天保 14 年（1843）の富士山雪代絵図（下吉田村）に桂川左岸及び各堀沿いに築造された堤が描かれていることから、雪代より前か後かは不明だが堤が築造されていたことが分かる。

オ　雪代災害からの復興

（ア）上中丸遺跡（市内小明見）にみる復興の痕跡（富士吉田市 2012『上中丸遺跡（第２次）』より）

平成23年度の上中丸遺跡の発掘調査で複数条の溝が確認された。溝は、1.3m間隔で構築され、幅は30㎝、深さはかつての耕作面から30㎝程と推定される。調査地は、天保14年に作成された絵図をみると、田んぼであったことが分かる。また、表2の№6、7等の文献から小明見が天保5年の雪代に襲われたことも分かっている。この遺構と類似する遺構が、神奈川県の山北町河村城跡や平塚市の真田・北金目遺跡で発掘されている。これらの遺構は、宝永噴火で降下し耕地を覆いつくした火山灰を、溝を掘ってその土と火山灰を入れ換える「天地返し」や元の耕作土に火山灰を混ぜ込む「うないくるみ」の痕とされる。

上中丸遺跡で確認された溝は、構築間隔が広く、河村城跡や真田・北金目遺跡の方が狭いなどその性格が大きく異なるため、全く別の遺構である可能性が高いが、雪代により覆われた田んぼを復興した痕である可能性もあり、今後も市内の発掘調査で検証していく必要がある。

図３　「天地返し」のやり方

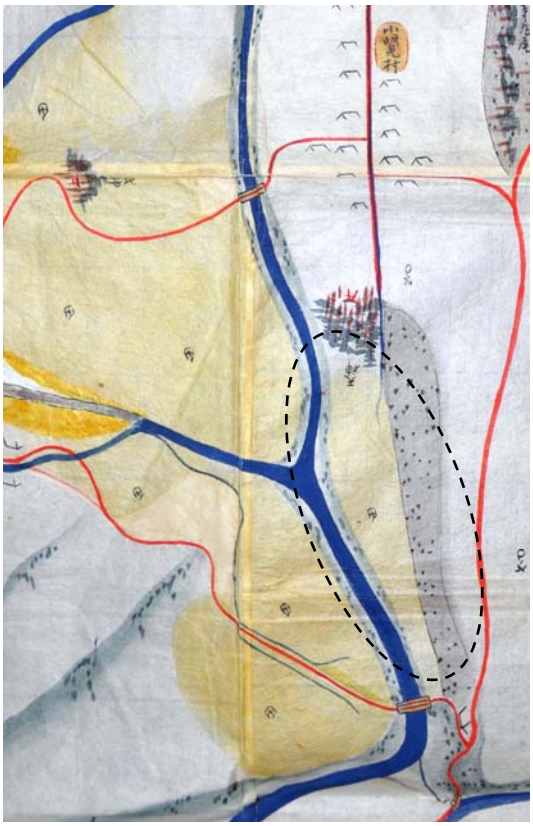
写真３　発掘された天地返しの跡（河村城跡）

写真４　天地返しかうないくるみの跡か？（真田・金目遺跡）

写真５　溝跡（上中丸遺跡）富士吉田市 2012『上中丸遺跡（第２次）』

※図３・写真３・４　神奈川県立歴史博物館2006『富士山大噴火－宝永の「砂降り」と神奈川』より転載

資料 8-1　大明見村の中沢堤



資料 8-2　上中丸遺跡（点線）の田んぼ

（畑田成絵図（大明見村・小明見村）天保 14 年（1843）　富士吉田市歴史民俗博物館保管）

（イ）　雪代による丸尾（溶岩台地）の耕作地化（星野芳三 2001「第 4 章第 1 節近世の農業経営とその変遷」『富士吉田市史』通史編 2）

「文化年間と推定される「新倉掘抜」に関する「覚え書」文書の中に、「丸尾かいほつの儀は石ならし致し置き、富士山雪代満水の節、土砂引き入れかいほついたし候場所に御座候」とあり、雪代を利用した土地開発が行われたことが分かる。」

（ウ）　語り継がれる雪代（富士吉田市教育委員会 1977『富士吉田市の文化財（その７）民話』より）

十七、天保の飢饉と午年の流れ

大明見は流れる
向原焼ける
中の新田かてい死

向原　舟久保　兵部右衛門

天保五年年陰暦四月八日の真昼間、この地方へ史上最大と言われる大雪代が押し寄せた。また、その前年、天保四年から天保の大飢饉が始まった。

この歌が何時、何人によって作られたかは誰も知らない。これは午年の大雪代と天保飢饉の悲惨な有様を端的に表現した農民の心からの哀歌である。飢饉と雪代の板ばさみに遭った人々の口から何時か自然に流れ出た歌である。何と悲しいあわれな響きをもっていることか、大雪代に家を耕地を流され、加えて物凄い不陽気、それも七年も続いたと言われる不陽気を私達の先祖はこの土地でどうして暮らし、生き抜けたのであろうか。また、食うため、生きるためにどんな知恵をしぼったか、少年の頃、よく雪の下の炉端の語り草に、夕食後の一家団欒に、また、風呂の順を待つ湯はいりの人々の間でそれとなく語りつがれた話、その中にある午年の流れの話、大方は炉端である。毎日火代の火の尽きない様に昔噺は尽きないのである。そして、大雪代は両明見だけではない、下吉田もひどかった。

炉端の話は一言だけ下吉田村のことを言っていた。

「下吉田の丸本の前が本線となって雪代が流れた」と、午年の流れは東と西を襲ったのだ、両明見と下吉田を……。

向原の山岸という所に「チョンマゲじいさん」という老人兄弟が住んでいた。

この二老人は死ぬまでチョンマゲを切らず、そのため名前より山岸のチョンマゲじいさんで通っていた。

さて、このじいさんが時折、家へやって来ては四方山の話をした。この話はこのじいさんが「俺が子供のとき俺のおじいさんから聞いた話だよ」と言って話した話だそうだ。

その日はお釈迦様の生れた日で、寺ではどこでもこの日を仏降日即ちお釈迦様の生れた日と言い、お釈迦様を祝い、又大釜に甘茶をつくって、壇家一般に振舞った。壇家の人々はてんでに徳利を持って旦那寺へ甘茶を貰いに行き、花に飾られた金銅のお釈迦様に甘茶をそそいでお祝いし、甘茶を家へもらって帰り、家中で分け合って呑み、無病息災を祈り、残った甘茶は家の廻りに撒いて悪魔除けとした。

その日は朝から馬鹿暖かく、空はどんより曇って、今にも雨が降り出しそうな空模様であった。ただ、お山（富士山）は夕立雲の様な黒雲に覆われ、無気味なほどであった。じいさんは年寄りの気安さから九ツ（今の十二時前後二時間）の（午前十一時過ぎ）頃、一升徳利を下げて西方寺へ出掛けた。空は曇っていたが、雨は大したこともなく、ポツンポツンと時折落ちる程度で、傘を持つほどのことはなかった。ぶらぶらと歩いて丁度向原のお宮の前にさしかかったとき、お山の方で底力のある地響きをもった何とも無気味な音がした。

ハテ聞いたこともない音だが、と思いながら、別に気にも留めず、じいさんはそのまま寺に行き、ゆっくりお釈迦様にお詣りして、持参の徳利に甘茶を貰って家に帰り、皆で甘茶を頂き各自一杯ずつ呑んだとき表で急に人声がした。

「雪代が押して来たぞう。西方寺のせどっ方へ。」「西方寺のせどっかたへ雪代が押して来たちゅうぞう。」と言う呼び声が静かな村の空気を突んざいた。

「ソレッ」と近所の家から飛び出す人々、村はにわかにそうぞうしくなった。時刻は八ツ時（午後一時半前後で二時間）の一時頃である。じいさんは「雪代早えもんだ、俺がお宮の前で聞いた無気味な音は雪代が八合目をずり落ち、木山を押し落とした音にちげえねえ寺で時も過したし、ぶら〳〵帰ったのでそれから家へ帰るまで、小半時（約一時間）お山の八合目から西方寺のせどまで一息に押して来たわけだ。」そうして、その日はただ大騒ぎで暮れたが、翌日は天気が回復した。お山は青空にくっきりそびえていて昨日のことは忘れられた様に静かであった。しかし、恐ろしい雪代の爪跡がお山の八合から裾までまざまざと見えた。それを俺のじいさんはこう言った。

「丁度八合目の鎌岩のあたりで、そうさな、ここから見て丁度ねこざ一枚分位の雪崩があり、それより下へ木山を根こそぎ帯の様にくずれ落ちた跡がはっきり見えたよ。」そうしてまた話がつづいた。

「その頃は大雪が降って、時にやあ中の茶屋の松の木が見えなくなるほどつもった。特別、この年は春になって大雪があって、やっぱり中の茶屋近所の松はあらかた見えなかった。雪代が出にやあ良いがと皆しんぺえしていたんだが、とう〳〵来ちゃった。」と言った。「チョンマゲじいさんの午年の雪代の話はこれでおしまい。」

十八、雪代は瀬の向くまゝ

向原　舟久保　兵部右衛門

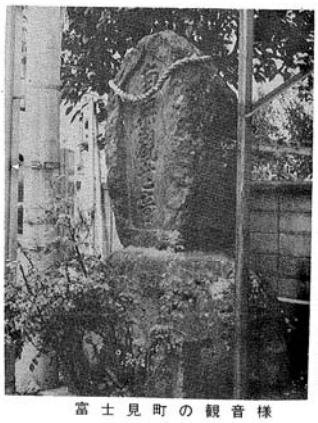
「雪代が来たぞう。」「すげえ雪代がお山の方から押して来たぞ」と言う叫び声に新田部落の人々は皆丸尾の方へ飛び出した。大明見の方からまるで小山の様な土砂とつが(雑木)の大木が一かたまりとなってまるで悪魔の形相で物すごい音を立て、のしかかる様に押して来る。そして、土砂と立木のかたまりの上にこわれた家、タンス等が乗っている。人々はただ唖然としてこれを見つめていた。全く手の施しようもない。雪代は一直線に天矢場の方へ向いての たうって下って行く。 もう先端は丸尾へかゝろうとしていた。見ていた人々は誰れもが心に思った。

「丸尾の手前は深山の方へなだらかな勾配で下っている。それだから雪代は向を変え桂川のお釜のあたりへ落ちこむだろうと。」

ところが、雪代は少しばかりの勾配などなんのその、そのまま一直線に天矢場へ向かい、今の笹子橋から桂川へ落ちてしまった。そこで、人々は口々に「雪代はおっかねえ、瀬の向いた方へ流れる。少し位高かろうが構わねえ」と言って、皆その瀬が少し東へ振れていたらと心の中で恐れおののいた。全く幸運だった。見ていた人々はホッとして、それぞれ家へ帰った。家の母がおばあさんから聞いた話である。

十三、福源寺の南無観世音の由来

泉町　小山田　福太郎



富士見町の観音様

午年の大雪代が如何に物すごかったか、それを伝える記念碑がある。それはその雪代で運んで来た大きな石である。福源寺の地所で、国道と新町明見線の交差点にある南無観世音と刻んである観音様がそれだ。大雪代が月江寺大門と今の養命舎の間位の所まで運んで来た。雪代の幾年か後、この石に南無観世音と刻んで、この所に建てたものだ。当時は道幅も狭くもっと国道の中にあった。

さて、この観音様を造り、建立の場所が問題になった。当時の人々も思案投げ首、しかし、皆で協議の末、今の宮下町と富士見町の境へ建てることにした。つまりこの観音様は二部落の境石でもある。何にしろ仏様のことだから丸く治まったわけだ。

今、午年の大雪代の跡をたずねても、もう何処にもその姿を見ることは出来ない。しかし、この観音様はその大きさからも当時の雪代の大きさ、自然の力のすざまじさを物語るに充分である。とにかく富士山から来た石だ。八合から下の何処から来たか、それはわからない。おじいさんからこの話を聞いて、帰り道に早速よって見た。何時建立したか、誰が書いたか、見度いと思った。調べても何も書いてない。その時、渡辺えいさんというおばあさんが家から出て来て、「何を調べるのですか。この石は私の家の九十二歳のおばあさんが午年の雪代で流れて来た石で建てたと言っていましたよ」と言った。今日は雪代の話に縁がある。特にこの石は、南無観世音、観音様の引き合わせかな。

コラム【富士山の沢と堀】

富士山麓では、山を刻む水のない谷筋の名称として「堀」と「沢」のどちらかが使用されている。その使用基準としては、次の２つが考えられる。

① 「沢」は、複数の「沢」が合流して水の流れる「川」となるか「川」に合流することが多い。「堀」は、複数の「堀」が合流して「川」になることは少なく、ただ「川」に合流することが多い。

② 「堀」は「雪代堀」とも呼ばれ、「雪代」が流れる谷筋となっている。「沢」も「雪代」は流れるが、それは「雪代」とは呼ばれず、「大水」・「満水」・「洪水」とされることが多い。これは、「堀」を流れる雪代は、雪が押流すものであるが、「沢」を流れる雪代は、水が押流すものであるという見え方の違いによる言葉の使い分けと考えられる。なお、「堀」は村に至るまでの距離が短く、「谷」は村に至るまでの距離が長いか標高差が大きいという傾向があり、こういった「雪代」の見え方の違いが、「雪代」が山麓に至るまでの距離や標高差に起因する可能性はある。つまり、村までの距離が短ければ雪の形状を残し、村からも山が近いため雪が崩れたものと認識しやすいが、村までの距離が長ければ雪は解けて水となり、また村からも山が遠いため、雪が崩れたものと認識しにくいということが想定される。

「沢」は富士山西麓・南麓・東麓で使用され、「堀」は富士山北麓で使用されるという地域的偏りがあるが、これは単に方言というわけでなく、①・②のような「堀」と「沢」へ対する認識の違いが反映されている可能性がある。

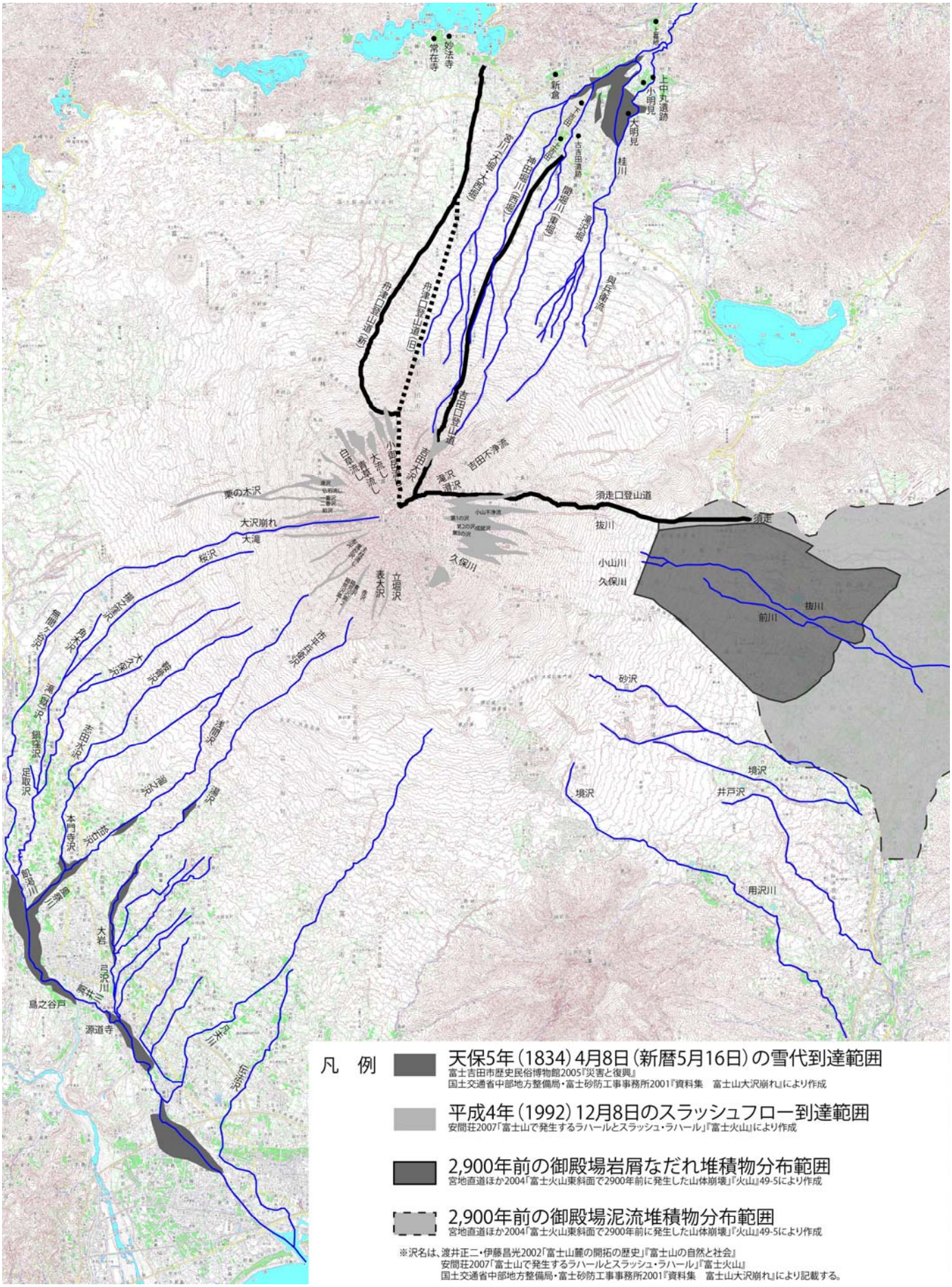


図６　富士山雪代災害範囲図